

●特別寄稿●

『人工呼吸』第30巻刊行によせて

大阪行岡医療大学 医療学部理学療法学科 救急医学講座 行岡秀和

人工呼吸第30巻刊行を記念して、前編集委員長として何か書いて欲しいと依頼がありました。まことに光栄でお引き受けしたのですが、長い歴史のある本誌についてあまりにも無知であり、以前の編集委員会の活動についてもほとんど知りません。そこで、自分自身が論文を執筆した時の思い出や長らく雑誌編集に関わってきたことについて述べたいと思います。

はじめて英文論文が掲載されたのは、1981年、Anesthesia and Analgesia (A & A) という雑誌でしたが¹⁾、編集委員長のGreene先生には本当にお世話になりました。英語は下手、論文の書き方も分かっていない日本人の原稿に、先生は細かく添削してくださいました。論文の書き方を一から十まで教えていただき、本当に勉強になりました。ただ、投稿されるすべての論文を詳細にチェックするのはどんなに大変だろうかと考えてしまいました。

Greene先生は、1977年から1991年まで、実に14年間、編集委員長を務められ、A & Aを一流雑誌に育てられました²⁾。この間いくつかの論文を投稿しましたが、論文の採否も重要ですが、それ以上に先生からのレターを読むのが楽しみでした。その後、いろんな雑誌に投稿しましたが、これだけ細かく論文をチェックしていただいたことはありません(当時、A & Aに投稿した多くの人がそう思っているに違いありません! ²⁾)。最初に投稿した英文誌の編集委員長がGreene先生だったことは幸運であったと今でも思っております。また、編集委員長をはじめとする編集委員会の熱意が、雑誌のレベルアップに重要であると感じました。Greene先生とは、お会いしたこともお話したこともありません

が、私にとっては間違いなく恩師の一人です。

1984年、A & Aに投稿した論文が戻ってきました。Greene先生のレターは好意的で採用の可能性が高いと感じました。ただ、統計のやり方が良くないので修正せよとのことでした。当時、英国ウェールズ大学に留学中であり、統計についての分かりやすい文献は手に入らず、相談する先輩・同僚もいなかったため、思い切ってMapleson先生に尋ねました。先生は、ゆっくりと論文に目を通し、なんと「これは君には少し難しいので、私が統計計算をしてあげよう」と言ってくださったのです!

論文の修正が完了した時点で、Mapleson先生に共著者になっていただきたいとお願いしました。ところが、意外にも答えは「ノー」でした。そればかりか、論文のどこにも自分の名前を記載してはいけないと言われました。理由は、「論文作成に関与していない」でした。これは、小生にとってかなりショックでした。共著者に世界的に有名なMapleson先生の名前があれば、採用は確実ですし、論文に箔が付くと考えていたからです。「この論文は大したことはない」と落ち込みました。しかし、予想に反して、本論文は、問題なく採用され、その後、多くの欧米の教科書に引用され、小生の代表論文になったのです³⁾。

2004年のBritish Journal of Anaesthesiaに、Mapleson先生の論説が掲載されておりました⁴⁾。Mapleson先生は、メイプルソン回路で特に有名ですが、その研究はウェールズ大学麻酔科初代部長であるMushin先生の指導で行われたにもかかわらず、単著で報告されています⁵⁾。当時、Mapleson先生は駆け出し、Mushin先

生は大教授、「このペーパーが Mapleson と Mushin の共著であれば、Mapleson の名前はこんなに有名にはならなかった」と述べておられます。20 年経って、目からうろこが落ちました。

2000 年、日本集中治療医学会機関誌編集委員会に委員として参加しました（後に担当理事）。丸川征四郎先生、今井孝祐先生、岡元和文先生といった個性豊かな 3 人の編集委員長にお任せしましたが、編集委員の心構え（安易に reject しない！ 初心者論文ほど懇切丁寧！）を学ぶことができました。特に丸川先生は、停滞していた機関誌刊行の立直しのため、奮闘しておられ、時には独裁的とも思われる情熱で、委員会を引っ張っておられました。

2005 年より、本学会機関誌『人工呼吸』編集委員会に加えていただき、中沢弘一委員長の下で活動を開始しました。比較的仕事も少なく、「VAP」の特集等を担当しておりましたが、出版社が変わったことは認識しておりませんでした。2008 年、中沢先生より次の委員長になって欲しいと言われました。編集の仕事に興味があったことと、あまり忙しくなさそうだと考え、お引き受けしました。

編集委員長になって驚いたのは、事務局・出版社がほとんど機能しておらず、投稿原稿が宙に浮いた状態になっていたことです。執筆者にお詫びし、編集作業を急ぎました。また、『人工呼吸』26 巻 1 号（2009 年）に、本誌は、「人工呼吸に関する専門誌という高いレベルを維持しつつ、呼吸管理の専門家ではない多くの医療従事者に分かりやすい情報を提供する」ことを目的とし、「投稿論文の増加」を目指すことを明確にし、雑誌のデザイン、内容を一新しました⁶⁾。このため、短

期間に多くの作業を行う必要があり、どうなることかと思いましたが、新事務局、メディカ出版の宮本さんの絶大なご協力で、何とか頑張れました。有難うございます。2010 年には、投稿論文は採択後、速やかに本学会ホームページに掲載されるようになりました。

現在、『人工呼吸』は、星邦彦編集委員長を中心とする編集委員会が、投稿論文の増加・質の向上を目指して頑張っておられます。まさに、「雨降って地固まる」になりつつあります。私も、現在、日本臨床救急医学会雑誌の副編集委員長として、鈴木正之委員長を補佐しております。共に、多くの職種から論文が投稿される共通点の多い雑誌です。

『人工呼吸』のますますの発展を願ってやみません。

本稿の著者には規定された COI はない。

参考文献

- 1) Yukioka H, Tatekawa S, Nishimura K, et al : A study of a noninvasive method for measuring central venous pressure during general anesthesia. *Anesth Analg.* 1981 ; 60 : 901-3.
- 2) McGoldrick KE : Nicholas M. Greene : visionary educator, clinician, editor, and humanitarian. *Anesth Analg.* 2012 ; 115 : 1423-30.
- 3) Yukioka H, Yoshimoto N, Nishimura K, et al : Intravenous lidocaine as a suppressant of coughing during tracheal intubation. *Anesth Analg.* 1985 ; 64 : 1189-92.
- 4) Mapleson WW : Fifty years after — reflections on ‘The elimination of rebreathing in various semi-closed anaesthetic systems’. *Br J Anaesth.* 2004 ; 93 : 319-21.
- 5) Mapleson WW : The elimination of rebreathing in various semi-closed anaesthetic systems. *Br J Anaesth.* 1954 ; 26 : 323-32.
- 6) 行岡秀和 : 『人工呼吸』大幅改訂にあたって一編集委員長からのごあいさつ一. *人工呼吸.* 2009 ; 26.